東南アジア研究　19巻1号　1981年6月

現地通信

パリマの美しい人

桜　井　由　躬　雄

チェンラナ河は大河である。はるかに南スラウェシ内奥の大湖に発したこの河は，中央山岳地帯の幾多の支流を呑みこんで，ボネ湾に注ぐ。パリマはチェンラナ河口の巨大な泥流の世界に浮かび上がった細長い小島である。幅10 m，長さ1 km ほどのサンゴ岩をしきつめた道路の両側に，杭上家屋が1列か，時には2列立ち並ぶ。南側はチェンラナ河に面し，北側は果てしない湿地帯がつづく。その中を幅60 cm，長さ7〜9 m ほどの木舟が，ヤマハやホンダのエンジンをのせて，ゆったりと，また轟音をあげて走りまわる。いつでも家並みのどこかからかは，ヴォリュームを一杯にあげたラジオの歌謡曲か，イスラムの聖詞かが流れ，その中を人々はゆっくりとただ道を往復している。喧騒と安穏が，近代と伝統が，何の矛盾もなく混在して，一つのおおらかな世界を作っている。

時には早朝のチェンラナ河に浸って水浴（マンディー）と排泄を行う。早朝の引き潮時は，泥が多いが排泄には適している。上げ潮時では逆流して，自ら，自らのものを浴びかねないからである。各戸のインタヴューも7時から10時半ごろに行う。それ以後は暑熱と，そして各戸がほとんどまわりもちで行う連日のパーティーに出席のためにできない。午後はひたすら暑さをこらえて眠る。眠れなければ，やむをえず片言のインドネシア語を目一杯に使って，やはり眠れぬ昼の人々と雑談にふける。対談者は相互に相手の話が解らぬが，しかし大声でどなりあう。何となく話は延々とつづく。話がなければ，ひたすら「パナス」「パナスバニャ」「パナスバニャバニャ」（暑い。非常に暑い。非常に非常に暑い）といいあう。頼みとする通訳の鈴木恒之氏（東京女子大）は，いかなる暑さといえども眠りつづける。特技である。3時をすぎると，暑さはいささか弱まる。人々はサッカーやバドミントンに興じ，筆者は警官の監視下にガルドゥ（小さな常設の雑貨屋）をめぐっては全商品を「イニ・ハルガニャ・ブラパ」「ダリマナ」（これいくら。どこから来たか）とひたすら問いつづけ，警官はこれをブギス語に訳してどなりつけ，店主はおそれいっては何ごとかかたり，警官がこれをインドネシア語になおし，というよりは警官が値をつけ，鈴木氏が訳して筆者に伝える。2時間もたつとぐったりして，宿舎の村長宅に戻り，再びマンディー（この時は満潮のさかりをすぎて問題はない）にふけり，ヴェランダで夕陽をみながらおそるべき蚊との戦いに突入する。

パリマに来て2日目だったか，午後に隣村のアジャラッセの戸数調査を終えて，老婦人と少女がキネをふるって脱穀しているところに出会った。ここではほぼ20 kg のもみをそのつど屋根裏からとりだしては乾燥し，こうして脱穀しては村にただ一つの精米所にはこんで精米してもらう。たまたまアジャラッセでもみの乾燥をみてきた筆者は，脱穀場面の写真を何とかとろうとした。村の子供たちは写真をとられることには熱狂的である。しばしばレンズの前に立ち塞がれては，シャッター・チャンスを失う。ところがブギスの女性の場合，ある一定の年令をすぎると，客人に姿をみせることを極度に嫌う。少女はちょうどその年令にさしかかっていたのだろうか，筆者がカメラを構えるとキャッといって奥へ逃げこんだ。その一瞬暗い土間の中に，彼女の白い丸顔が，ファインダーを横切った。小型カメラの薄青いファインダーのせいでもあったのだろうか，あるいはチェンラナ河の青い夕暮れのせいでもあったのだろうか。その白さと大きな黒い瞳が，こよなく美しくみえた。

翌早朝，子供たちの大行列をひきつれて村道を歩

いている時，少女に会った。この時，少女は真っ白な半袖のブラウスに同じく純白の短いスカートをはき，背中に濃紺のキャンバス地のランドセルを背負っていた。通学の途中だった。

熱帯の朝のまばゆい光の中に，真っ白な少女は，聖少女と呼ぶにふさわしい美しさだった。筆者が軽く黙礼すると，少女は顔を紅潮させてやはり深々と頭を下げた。

（ちなみに，もとよりこの地の洗濯は全てチェンラナ河の泥流中で行われる。したがって，水中でマンディーを行えばタオルはことごとく雑巾色を呈し，下着はいかにすすげども白さをとり戻すことはない。なぜその中で彼女の服のみが純白にみえたのか。一つにはそれは筆者の文飾であり，一つにはサブンエコノミクスと称する洗剤中にまる1日浸すという，この地の洗濯技術のせいである。）

その夕暮れだったろうか，村長宅のヴェランダから道路を見下ろしていた筆者の前を，今度は薄いブルーのワンピースを着けた少女がとおりすぎた。夕暮れまでの2時間，村のモスクの学校で宗教教育が行われる。彼女はきっとその帰りだったのだろう。赤茶けたサンゴ岩の村道の上に，少女のスラリとしたワンピース姿が紅の夕陽に映えてまた限りない美しさを示していた。ふと見上げた少女の眼と，少女をおいつづける筆者の眼が一瞬出会った。少女は今度は軽く黙礼すると足早に立ち去った。

この地にはデッパナブギー（ブギス菓子）中の名品オンディーオンディーなるものがある。黒砂糖をもちでくるんだものであるが，この作り手の名手と称する婦人が無数にいる。甘党にあらざる筆者はブギス人に媚びて「オンディエナック」（オンディーはうまい）などとあやまって叫んだのが，不幸のはじまりであった。爾来，オンディー作りの名手はほぼ連日，このおそるべき甘菓子を，しかも馬に食わせるほどこしらえては，日本人を招く。そして皿一つ完全に平らげるのがアダット（慣習）であるという。歴史家のはしくれとして，アダット共同体のおそろしさを知る筆者は，それこそ拷問にかけられた心地で，これをさもうまそうに食べるのである。ある時は村長までが名手のひとりをよびよせて，これを作らせては筆者の腹につめこませる。そしてこの名手を手伝いにきたのが，かの美少女である。ここぞとばかり，筆者は知る限りの礼の言葉を述べ，1枚の写真をねだったが，彼女はその名手の友人とともに恥ずかしがって逃げまわるのみであった。その日ほど筆者のカメラのフラッシュが2mを有効限度とすることが悔やまれたことはない。

機会はパリマ最後の日に来た。この日の昼，筆者は小学校の先生の家に招かれて食事をしたのち，校長先生の案内で学校をみせてもらった。その玄関で筆者は，白いヴェールをかぶったその美少女に出会ったのである。筆者は，どうかお願いだから写真をとらせて下さい，などというインドネシア語の語彙はもちあわさない。たとえもっていても，もはや有効ではなかったろう。筆者は日本語で大声でさけんだ。「きみはあまりに美しい」。

Heart to heart であったか否か，彼女はビクッと立ち止まり，最初は顔をおおい，ややしばらくして，キッとその美しい顔を筆者にむけた。その時，何という不幸だろうか。筆者のカメラのフィルムはつきて，シャッターは下りなかったのである。時よ止まれ！筆者はフィルムを巻き戻して交換した。その間彼女は毅然として，その姿勢を崩さず，その黒い大きな眼で筆者をみつめつづけた。そして筆者はようやく，ヴェールをとった彼女のスラリとした全身を写真におさめることができたのである。願うらくは，パリマの美しい人のあの姿が見事にフィルムの上に現像されていることのみである。

そのあと彼女は小学校6年生の教室に入っていった。（12月17日南スラウェシ・ワタンポネにて記す）

（京都大学東南アジア研究センター助手）